

夫婦船綴り ——乗れた 獲れた 波にゆだねて——

久之浜漁協婦人部

我妻 宣子

1. 地域の漁業の概要

久之浜は、我が国で一番面積の広い市である福島県いわき市の北部に位置し、底曳網漁を中心に、平成9年度の水揚高は約2,000トン、10億7千9百万円でした。

底曳網船は、8トンクラスの小型底曳網が6隻、沖底船が8隻で、ヒラメ、カレイ類やタラ、タコ等を漁獲しています。また、小型船は34隻で、シラス、コウナゴ、オキアミを対象とした船曳網、アナゴを対象としたハモカゴ漁、カレイ類を対象とした刺網やタラを対象とした釣りが主に営まれています。

2. 活動課題選定の動機

今から25年前、私は理容師をしていました。そろそろ年頃でもあるし、習い事でもしたらという母のすすめで実家のある楢葉へ戻り、町で開校していた「花嫁学級」というところに通っていました。船に乗る運命になろうとは知らずに毎日せっせと修業していたものでした。

父は遠洋漁業で頑張っていました。好きな漁でもしてのんびり暮らしたいと大型船を降り、中古の船捜しを始めたのです。久之浜、四倉、小名浜と……。なかなか見つからず結局、茨城の天津の方まで……。

運よくある人の紹介で適当な船も見つかり、素人の父はいろいろな面で世話になり、又、縁あってその方の息子だった夫との結婚も決まり、事情があって夫も父の仕事を手伝うようになりました。

ところが、15年前父が60才の時でした。それまでの船は老朽化が進み、設備が整っていなかったため、借金し船を新造し返済に頑張っていこうと働きはじめた矢先、突然父が「脳血栓」という病に倒れ、介護なしでは何も出来ない体になってしまったのです。入院すること2年、リハビリに励み、今では身の回りの事はすべて自分でできる状態には回復したのですが、その当座はすべてにつけ歯車が狂い、言葉に表わす事の出来ない程ショックでした。まだまだこれからという時に母もつきっきりで働き手を失い、息子もまだ小学校へ入学したばかりで、少しの間は夫1人で「刺網漁」をしていましたが、資材やら人手が意外とかかり、前に伸びる漁ではありませんでした。

その頃、夫の実家のある天津では「1そう曳網漁」が盛んで、それなりの成果を上げていると聞き、幸いに乗り子さんも見つかり「刺網漁」から「1そう曳網漁」への転換を図ったのです。

夫が結婚する前、実家で経験済の漁法だったので信頼しそれ程心配はなかったのですが、まだ当時久之浜では手掛けていなかったで、半ば賭けでもありました。

3. 実践活動の対策及び成果

その結果、漁の方は順調で25艘の小型船の約半数が「1そう曳網漁」へと変わり、船を新造する人、エンジンを大きくする人と、とっても活気にあふれた時でした。我が家も又一回り大きい船を求め、水揚げを伸ばす事が出来、その年3番目の水揚げをして優賞旗を頂いたのが今となってはいい思い出です。

ところが、今から3年前、都合により乗り子さんが船をおりる事になり乗り子さん探しをはじめたのですが、就職難だの失業率3%だのという時代にあっても、なかなか船に乗りたいたいという人がいないのです。夫も気苦労が重なってかストレス性の胃潰瘍になり、1ヶ月の入院生活を余儀なくされダブルパンチをくらったような毎日でした。

息子さえ船に乗せていればこんな時安泰だったのかもしれませんが、夫は自分の生い立ちをふり返り、本人が望まない限り決して無理強いはいしまいと決めていたようでした。

夫の父は、なかなかの頑固者だったそうで「長男だから家業を継ぐのは当たり前、船方には学問はいらぬ。それよりも経験」と小さい頃から船に乗せられたそうです。あまりの辛さに自分の人生を呪った事もあったとか。昔はそれでも通用したのでしょうか、今は違うと思います。息子には息子の人生があるし、私もそれでいいとさえ思いました。自立し海上保安官となり巣立っていった今、あてにする事も出来ず、船曳網に限り夫1人での操業ではとっても危険を伴う仕事なので、女の私でも何か手伝えるのではないかと相談した結果、実家のある大津では「夫婦船」が何隻か操業していると聞き、27年前当時女性では珍らしかかった自動車の免許取得に挑戦したのを思い出し「その人達にも出来るのだから私にだって出来ない事はない。」と決心し、船に乗ることになったのです。

何をするにも機械化されているので、その手順さえ覚えればそんなに難しいこともなく、だいたい1網20分位を1日何回も繰り返す漁なので、女の私相手では他船と比較すると番数の面でハンデを負う位で、あまり影響はなく務まる内容でした。

何ととっても、船に乗る事で一番苦勞したのは「船酔」だったように思います。それまでおだやかだった海が風が吹こうものならたちまち荒れ出し、酔っているからとはいえボールからは次から次へとロープやら網やらが揚がってくるし、手をかけなければすぐ山のようにたまって次の漁の障害になってしまうのです。

何日過ぎても酔う私は、時にはせつなくて「今日の魚はいらないから港へ帰ろう。」とついつい弱音をはく日もあるのです。そんな時、決まって夫からは「もう少し意地をかめ。」だの「根性が足りない。」だのと、喝がとんできたものでした。

4. 波及効果

何度となく太平洋の恐ろしい洗礼も受け、精神的、肉体的にも鍛えられ、すっかりあてにされ任される仕事も増えました。水揚げは多少落ち込んでも、金銭的には勿論のこと、精神的にゆとりがもて充実した日々を送ることが出来るようになりま

した。

去年は、はじめて沖釣りに挑戦しましたが船曳網とちがいレジャー感覚で楽しめ、200メートルもの深海の魚が糸を伝わって手に伝わる感触は何ともいえない感動でした。

5. 今後の課題

昨年は不景気の波が日本列島をおそい、大手銀行が破たんする時代。将来への不安も一段と強まりわが浜も例外ではありませんでした。拍車をかけたように魚価の低迷、漁獲量の減少と、漁業を始めて以来こんな年はなかったように思います。少子化の今、人手不足で悩んでいる方もあろうと思います。

こんな私でも何とか務める事が出来たのです。われわれ小型船は「家族」で地道に頑張れば、この世の中を乗り切れると思います。これから第二、第三と我が家のような「夫婦船」が誕生する事を大いに期待し、船に乗ったおかげで平凡な主婦には味わうことの出来なかった経験と喜びを胸に、すべてプラス思考でこれから先健康に気をつけ、正組合員として認めてもらった今、周りの方々に感謝し21世紀に向け女性の地位向上のためにも微力ながら一緒に考えていけたらいいな——— と思います。